

## 好奇心をポケットに入れた探究者でありたい

私の「なんちゃってカブトムシ研究」

北野小学校長 丹羽 郁人

大人自身が探究者になること。学ぶことの喜びを忘れず、今でも好奇心や探究心を持ち続けていたい。

小さいころから虫は苦手である。というか、嫌いである。ちょっとした茂みに入ると、体中が痒くなる。

息子がまだ幼稚園児のころ、神社のセミ取りに連れていった。平気でセミをつかみ取る息子をしり目に、私はいつも尻ごみをした。(笑) いまだにセミを触れないし、触りたいとも思わない……。しかし、義父が、畑にいたというカブトムシの幼虫なるものを持ってきてくれた時から、息子と共に、私の飼育活動が始まった。

今、カブトムシを観察していると、実に面白い。まず、びっくりしたのがカブトムシが「鳴く」ことである。「鳴く」といっても多くの動物がするように口で鳴くわけではなく、腹を動かすことで羽根をこすり合わせて音を出すのである。また、一つの餌を、お互い仲良く食べればいいのに、やたらめったらけんかをするのだ。けんかの弱い、角の小さい者は、いろいろ工夫して餌にありつこうとする。その情景が実に興味深い……。

カブトムシを何年も飼うと、疑問が次々に湧いてきた。「幼虫は何を食べているのか？ どういう土の時に大きくなれるのか？」「幼虫は、一か所に集まって生活しているが、集まるのはなぜか？」「お互いに邪魔せずに、蛹室（サナギ部屋）をつくる。なぜ邪魔されずに蛹室を作れるのか？」などである。



そして、最大の「？」は、「なぜ、カブトムシが我が家に飛んでくるのか？」である。

家は住宅地にあり、まわりの山や森はない。特に街灯、照明をつけているわけではない。餌も、いわゆる「昆虫ゼリー」であり、ぶんぶん匂うものでもない。では、なぜ我が家にカブトムシが数匹も飛んでくるのか？ 初めは、飼育していたカブトムシが逃げ出したと思っていた。だが、明らかに見たこともない(すなわち、色の異なる)カブトムシが連日、我が家をノックする。飼育中のカブトムシが呼んでいるとしたか思えないのである。では、どういう手段で呼んでいるのか？ どういう方法で仲間がいることを知りえるのか？ 音か、匂いか、振動か、超音波か？

夜遅くまで観察し続けた。カブトムシの関係する本を、何冊も読みあさった。それでもまだまだ「？」が多い。それがおもしろい。探究が続くことが、実に楽しい。そして、この楽しさを子供たちにも感じてほしいのである。

ファーブルは、泥まみれになりながら、昆虫を追いかけた。エジソンは、何度も何度も、何度も失敗をした。

「驚きと感動の種をまき、探究心の火をつける学び」の実現へ。

そのためにはまず、我々が、「驚きや感動」をもつ探究者であり続けること。それこそがその実現に向けた第一歩ではあるまいか。